様式３

会　　議　　録

<table>
<tr><td colspan="2">会議名
（審議会等名）</td><td colspan="3">さがみはら森林ビジョン審議会</td></tr>
<tr><td colspan="2">事務局
（担当課）</td><td colspan="3">森林政策課　電話０４２-７８０-１４０１（直通）</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催日時</td><td colspan="3">令和７年８月１９日（火）　１４時～１６時２０分</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催場所</td><td colspan="3">津久井総合事務所３階　第１会議室</td></tr>
<tr><td rowspan="3">出席者</td><td>委　員</td><td colspan="3">６人（別紙のとおり）</td></tr>
<tr><td>その他</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="3">９人（森林政策課長　他８人）</td></tr>
<tr><td colspan="2">公開の可否</td><td>■可　□不可　□一部不可</td><td>傍聴者数</td><td>１人</td></tr>
<tr><td colspan="2">公開不可・一部不可の場合は、その理由</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td colspan="2">議　題</td><td colspan="3">１　開会
２　議事
（１）令和６年度さがみはら森林ビジョン実施計画の進行管理について
３　その他
４　閉会</td></tr>
</table>

審　議　経　過

主な内容は次のとおり。

１　開会

事務局（森林政策課）で開会し、森林政策課長挨拶の後、次第に従い、会長が議事を進行した。

会議定足数及び傍聴者の有無について確認され、委員の過半数以上の出席と傍聴希望者がいることを報告し、審議会での承認を得た後、傍聴者が入室した。

２　議事

（１）令和６年度さがみはら森林ビジョン実施計画の進行管理について

ア　さがみはら森林ビジョン実施計画について

事務局から進行管理の方法、スケジュール等及びさがみはら森林ビジョン後期実施計画進行管理対象事業について説明を行った。

イ　さがみはら森林ビジョン実施計画進行管理について

事務局から進行管理シートに基づき、令和６年度の主な取組と実績、事業課評価及び令和７年度の取組事項について説明を行った後、質疑応答及び事業に対する審議を行った。

○重点事項その１、その２に係る審議会からの主な意見、質疑応答

【事業コード 1-2-1　さがみはら森林ビジョン普及・啓発事業（№１）】

（石原委員）指標に対して実績が上回っているので評価はＡとなるが、指標はイベントの開催回数や参加者数である。本来はイベントの実施によって森林に対する市民の理解度を高めるなどの目的があるのではないか。「森林に対する認知度等の効果測定ができた」とあるが、目的が達成できたか具体的に測る方法はあるのか。また、参加者がリピーターか初参加なのかによって普及啓発の内容も異なると思うが、分析はしているのか。

（事務局）参加者の認知度については、アンケートを実施して、さがみはら津久井産材や市内の森林の現状などの質問項目を設けて効果測定を行っている。参加者の割合は、イベントにもよるが、例えば、ＳＣ相模原のホームゲームでは、サポーター向けに出展をしているのでリピーターもいるが、初めての方にも参加いただいている印象はある。

（石原委員）アンケートを取って状況を把握するのは良い。指標はイベントの開催回数や参加者数で測っているが、例えば、認知度が上がらないなどの結果が出た場合には、イベントの内容を見直すなどの工夫も必要である。

（松本会長）効果測定だけでなく、得られた効果からブラッシュアップや見直しをしていく、原因分析までがセットである。イベント参加者限定のアンケートでは範囲が狭いので、例えば 5 年に 1

回、相模原市民に対して広くアンケートを実施して、その中にイベントに関連する質問を入れると、参加の有無も数値で分かる。最近は二次元コードを活用して回答する方法もあり、実施しやすくなった。実施方法を検討するとともに、アンケートにはイベントの周知なども入れると良い。

（杉本委員）ＳＣ相模原のイベントで、待ち時間に参加者の親子に森林の話をすることがあるが、8割くらいは森に関心はあっても森林について全然知らない。市内にどんな木が生えているのかも分からないため、話をすると毎回驚かれる。市内の山の状況を子育て世代に周知すれば、その次の世代にも伝わるのではないか。

（松本会長）待ち時間にクイズなどでつなぐ方法もある。親子のどちらかが関心を持ってくれれば良い。イベントの合間に、アイスブレイクや環境教育を通じて、市内の森林の状態について意識付けをしていくと良い。検討いただき、今年度のイベントから取り入れていただきたい。

（淵上委員）イベントの参加者募集をしてもなかなか集まらないので、アンケートの中で周知すると多く認知してもらえると思う。小学校の机の天板を交換する事業において、年間約1,000人の子どもたちに環境学習を行っているが、子どもたちを通じて親世代にも話をしてもらえる。

（松本会長）広く浅いイベントのほかに、例えば、ツアーのモデルケースを設けて、小学校の遠足などで林業の現場を見てもらうようなコアなイベントを考えても良いのではないか。この事業だけではなく企業の森や市民の森の事業にも関連することである。

（増田委員）温暖化対策の関連では大規模なアンケートを実施して、その結果によって関心の有無などが分かったので、例えばゼロカーボン推進課とも協力しながら、研究してはどうか。ただ、項目の設定については専門家の意見も聞いたほうが良い。

（松本会長）増田委員から発言があったように、他課の調査と一緒に行うと様々な分析ができるので、横方向に連携してはどうか。

（石原委員）今のやり取りの中でも、期待できる効果や実際の効果などがあったので、調書の取組内容の説明欄に、実施した結果を載せるだけではなく、成果も併せて書くと、説明がしやすい。

（松本会長）ＰＤＣＡサイクルにおいては必要なことなので、効果測定・効果の見える化をしてほしい。また、アンケートの項目はきちんと設計しないと数値的な分析ができなかったり、質問と質問との関連が分析できなくなってしまうので、よく考えていただきたい。

【事業コード3-1-1　「相模原市市民の森」整備事業（№２）】

（松本会長）「水源地域の森林を守り、育てる経験を通じて、自然環境に対する意識の醸成や林業への理解の促進等を図ることができた」とあるが、これは効果測定において数値的な効果が出ているのか。実際にそのような声があったのか。

（事務局）昨年度から、「相模原の森林を知ろう」というパネルを制作して、イベントでクイズ方式の説明をしている。例えば、相模原市内の森林の割合や県内での割合などを聞いて、相模原市の森林は神奈川県の水源として重要であることを伝えている。山のことは何となく知っていても、質問内容はよく知らなかったという話を聞くので、参加者に自ら発見するような方式で行うと、関心を

持ってもらえるイメージはある。アンケートで変化を見るためには、実施の積み重ねや質問の内容にもよるので、どのような内容が良いか検証しながら行っている。質問については、森林ビジョンを策定時に実施した、市政に関する世論調査や市政モニター調査と同じ項目も検討している。

（松本会長）令和元年東日本台風で大きな被害が出たので、ビジョンを作った当初と比べると、森林に意識が向いているかもしれないので、同じ質問項目とするのは良いと思う。当初からの変化を見ることも積極的にやっていただきたい。事業課の評価はＢだが、回数は減っていても参加人数は上回っているので、ＢではなくＡでも良いのではないか。また、枯損木の伐採本数は。

（事務局）13 本である。

（松本会長）放っておくと危ない木を伐採したのだから、コストに対するベネフィットは大きい。当初予定していた業務ではないがやらなければならないので、評価に入れてしかるべきではないか。

（杉本委員）ナラ枯れの危険木は倒れてしまっているものもあり、緊急的な対応が必要である。

（山﨑副会長）木が大きくなりすぎていて、伐採に時間がかかる上に危険である。機械が必要な場合は道も作らなければならない。手間暇がかかる。

（松本会長）市民の命を守るための業務なので、積極的にやらなければならないし、やったことは評価したいと思うので、ＢではなくＡでも良いと思う。

（石原委員）令和 2 年度から目標と取組がかみ合っていない。ハード整備が本来のメインであればそれを謳うべきと思うが、目標はイベント回数と参加者数が掲げられていて、それを上回る実績があるのに、評価がＢというのは説明しづらい。他にやりたいこと、やらなければならないことがたくさんあるというのは分かるが、単純に計画の評価となると、やはり書いてあることに対して結果がどうだったということで採点せざるを得ない。例えば「イベントを実施して効果はあったけれど、本来やるべきことができていないのが課題だ」と書くことはできると思う。

（松本会長）記載するならば、「事業を実施したけれど、当時の目標と厳密に照らし合わせるとこうなる」といったように、態度を明確にしていただければと思う。最終的に一般の方が見て納得できるような内容であれば良いが、逆に納得できない内容であると、評価はどうなのかという話になってしまう。その点についてある程度すり合わせをするのが審議会だと思うので、当初の内容に固執せず、いろんな見識を持った方から意見をいただいて、検討すれば良いのではないか。

【事業コード 3-3-1　企業の森の整備（№３）】

（増田委員）木もれびの森を企業の森に選定したことは、今までにはなかったことであり、市街地にある森だと参加しやすい。また、例えば、企業は一社でなくても、企業の集まりの団体が一緒に企業の森の活動に参加できる形も作れないか。

（松本会長）本質的なＣＳＲの場合は、福利厚生から切り離して考えて、例えば、市内で緊急的に整備しなければならない森林の施業費用を寄付してもらうことで、社会貢献的な活動とすることも可能だと思う。また、増田委員から発言があったように、一社だけではなく合同で参加してもらい、目標額に達したら事業体に整備を依頼するという方法も良いのではないか。何社か集まることで整

備ができて、企業の森の整備の実績にもなる。企業としては、荒れた山をこれぐらい綺麗にすることができたという方が説明しやすい。木もれびの森を選定するのは良いが、荒れた山がこんなにきれいになったというように、お互い分かりやすいような森を選定する方法もあると思う。実際に整備するのは組合や事業体だが、成果として山がこんなにきれいになった、それを我々はサポートしたというのは、企業にとっては非常に価値のあることで、そして水源の森、神奈川県の水がめというキャプションをつければ、都市部の企業からも手が挙がるのではないか。

（石原委員）企業の森をどうしていきたいかということにも関係するが、「企業での社員研修等に活用可能な取組内容」とあるが、これは企業の意向ということなのか。ヒアリングは何社くらいに実施して、感触はどうだったのか。

（事務局）令和５年度から、相模原市の森林に貢献するため、企業として整備費をあてたり、様々なことを実施したいとの声かけが２社ほどからあった。実際に現場を見てもらい、ヒアリングをした結果としては、社員研修などで使いたい、参加したいということだった。また、視察場所は整備の適地ではあったが交通の便があまり良くなかったため、身軽で来れるところが良いとの話があった。また、先ほどのＣＳＲの視点や福利厚生のほか、企業の顧客を連れていきたいという話もあったので、その上で、現在、企業の森の制度を検討している。最近は、山にビジネスチャンスを探している企業は、山での体験など様々なことに関わることで、新しいものを見つけたいということもあり、多様なニーズにも対応できるような仕組みを検討している。企業の実施したい内容に応じて参加しやすいように、山間部だけではなくて都市部の方が参加しやすい企業もあるだろうということで、木もれびの森も含めた。先ほど話のあった、企業が集まった団体についても、参加は可能と考えている。また、森林での体験を希望する大学もあると思うので、対象としていきたい。

（石原委員）評価の話になるが、令和６年度の実績は、令和７年度の募集に向けて、その基本的な考えなどを整理したという成果だが、今の話を聞いている中では、まだ検討しなければいけない部分もあるように思える。先ほどの事業は、評価はＢではなくてＡではないかという話をしたが、こちらは逆なのではと思ってしまう部分もあった。

（松本会長）昨年度は２社にヒアリングして現地視察をしたとのことなので、調書には、具体的な内容を記載してもらい、ただ、締結に至らなかったと結果を示してもらった方が評価しやすい。なぜ締結に至らなかったのか、進まなかったのかについては審議会の場で議論できれば良い。具体的には「何社から接触があったが、締結には至らなかった」という書き方をしてもらったほうが良い。

（淵上委員）企業のＣＳＲの例としては、ＮＰＯ法人自遊クラブは企業から支援をしてもらい、つちざわの森を整備しているが、１年に１回、本社から 100 人ほどが来て間伐をしているという。実績としてはなかなか良い活動だと思った。

（松本会長）実施の際には、インストラクター的な人材を雇うのか、それとも既に実績があるつちざわの森の方にご協力願うのか、場所だけでなく、人という資源はとても重要である。場所は市有林を提供すれば良いが、アテンドする方と協働して実施する方法もある。場所だけ提供するならば、森林整備の費用補助を希望する企業に特化したほうが良いが、イベントや活用をするならば、ある

程度人材を用意する必要がある。

【事業コード 4-1-1　さがみはら津久井産材素材生産量の拡大（№.４）】

（松本会長）実績は凸凹しているが、令和５年度と令和６年度は生産量が増えている。事業体の努力の結果ではないか。

（杉本委員）神奈川県からも、水源施策の間伐補助金は残すと聞いている。今後また、主伐をして植替え作業をしていくこともあるので、実績が凹む時期もあるとは思うが、おそらくこの目標の数値よりも増えていくと思う。ただ、増えたは良いが、活用がほとんどバイオマスではしょうがない。

（松本会長）補助金や制度・政策に左右されるところはあるが、ただチップにするだけではなくて、需給の平準化のため、例えば、公共建築物のために市が木材をある程度ストックする仕組みを作っておくと、政策的なものに翻弄されることもないし、安全弁となる。行政が調整弁の役割を果たすということはすごく大きなことだと思う。うまく有効活用の仕組みを考えていけたら良い。

【事業コード 4-1-3　地産地消の促進（№.５）】

（松本会長）家づくり補助事業は、昨年度は 12 件のうち市内が３件、市外が９件である。なるべくなら市内でということだとは思うが、過去の市内と市外の割合は。

（事務局）昨年度が特出して増えている状況で、市内・市外は半々程度であった。

（松本会長）事業者の顧客が市外に多かったということか。

（事務局）市外に多かった。

（松本会長）市外の具体的な場所は。

（事務局）八王子市や町田市などの近郊が多い。

（松本会長）多摩産材がありながらも、さがみはら津久井産材が大きい消費地に流れていくことは重要である。町田市や八王子市において、さがみはら津久井産材で家を建てたということが知れるきっかけになると良い。八王子市は多摩産材があるため競合するが、山はあるが木材生産地ではない町田市のほか、下流の厚木市や海老名市では浸透しやすいのではないか。相模原市から補助金が出ていることが口コミで広がるととても良いと思うので、イベントに出展して補助金について周知することも良いと思う。今後の方針欄に記載されている「制度の洗い出し、分析、見直し」というのは、参画している方から意見を聞いているなど、ある程度の目途はついているのか。

（事務局）流通確認書については、素材生産者から写しを協議会に送ってもらっているが、発行するのが手間といった課題もある。県産材を発行する時にも流通を確認するものがあると思うが、そういったものと比較して、事業体の手間を減らして発行件数を増やしていくにはどうしたら良いのかについても検討をしたいと考えている。秋頃には、事業体と意見交換を行いたい。

（杉本委員）確認書を出してほしいと言われるが、その時はまだ量が確定していないため、出せない状況である。その後量が確定し、かなり経った頃に出すことになる。

（増田委員）ウッドショックの際に国内の木材の需要は高くなったのではないか。

（松本会長）ウッドショック後に価格が上がり、高止まりしている地域もあるが、上がってもバッと落ちてもとに戻った地域もあった。相模原市はいかがか。

（杉本委員）価格は少し上がったが、ウッドショックの時は在庫を持っていたわけではないので、売り上げは上がらなかった。その後、アメリカやロシアが木材を出さなくなって注目はされたが、すぐに切り替えられるという事業でもない。今はバイオマスなどで取り合いになっているので、Ｃ材価格は7,000円くらいである。今まで良いとされていたヒノキよりも、少し良くないとされるＢ材のスギの方が欲しいという業者が出てきているので、混沌としている。Ｃ材は、少し前までは県の林業センターで2,000円で引き取っていたが、今はそんな遠くまで行かないで、7,000円で引き取っている。青根のいやしの湯のバイオマス発電でも同じ金額なので、Ｃ材でも取り合いの状況が起きている。約５～６年前にも量が足りないことがあったが、その後大月でバイオマス発電があって、取り合いとなった。

（松本会長）大月のバイオマス発電は、当初は果樹剪定枝を中心にということだったが、いくら山梨県に果樹が多くても足りるはずがないため、Ｃ材が多く投入されるようになった。

（杉本委員）劣勢木を伐採して搬出しても売れなかったものが、多少お金になって所有者に返せる仕組みになって、きれいな山をもう一回作ることができるので、悪いことではない。

【事業コード5-1-1　市有林整備事業（№６）】

（松本会長）この事業は水みどり環境課と森林政策課の２課が関係している。主な取組・実績に丸太筋工が38ｍとあるが、これは森林政策課の実績だと思う。水みどり環境課は90ｍなので、これは記載もれではないか。丸太筋工は現地発生材を使用しているのか。

（事務局）使用している。実績については修正する。

（松本会長）「土壌流出の防止や森林保全に関して非常に効果があった」とあるが、手入れをすれば下層植生が繁茂して、本来の森林の機能に近づくという話はよく言われるが、埋蔵種子や土壌の状況によって、間伐しても10年くらい何にも生えてこない山は多くある。自然の植生の回復による土壌流出の防止を一番期待するところではあるが、余すところなく全部出すといっても、条件の悪い場所からは丸太を出せないので、切り捨てに近い形で、割と細い部分や劣勢木などが残されていると思う。そういうものでもっと積極的に筋工などを行い、土壌流出を抑えて、種がたまって植生が回復するような、予防治山と森林整備を合体させたような施策を、市有林ならばできるのではないか。相模原市のモデルフォレストあるいは試験林のような形で施業しても良いのではないか。

（事務局）県の森林整備の手引きに基づいて、浸食箇所は丸太筋工で止めている。それ以外のところは、埋蔵種子や土壌の流出を抑えるために、間伐した木は原則水平に置いて倒した状態で筋工の役割を果たすようにしている。相模原市及び神奈川県では、木を縦に倒したままではなく横に倒して筋工的に利用しているので、それなりの機能を果たしていると思う。

（松本会長）累計の目標には少し足りていないが、単年度の目標は超えているということで、Ａ評価で問題はないと思うが、やはり効果測定項目がないため、例えば、木を水平に置いておくだけで土

の流出が抑えられる、やっていない箇所はこれだけ土が出ているという見本を登山道や人が歩くところに設置して、環境教育や林業教育に使える現場というのを市有林の中で作ってもらえると数値がとれる。№１や２の事業と絡めて実施しても良いのではないか。

【事業コード 5-1-1　私有林整備事業（№７）】

（山﨑副会長）森林組合には組合員が約 1,500 人いるが、相続して登記はしても、所有者の届出がなかったり、親が亡くなったため森林を買ってほしいという連絡が多くなっているため、協力協約制度を続けてもらわないと、山の整備が全然できず荒れてしまうことになる。

（松本会長）実績は令和２年度が 1,187ha、令和６年度が 1,300ha で、５年間に 120ha、年間で約 20ha の整備を継続的に行っている。20ha を整備するための予算を市で出すのは難しい。安定的に 20ha 整備していたものがなくなるというのは、由々しき問題である。事業の単年度の予算額は。

（事務局）最近は約 1,700 万円である。県からの情報としては、現在協力協約を締結中の箇所は継続して補助金を出していく。令和９年度以降は新規締結は行わない。協力協約の制度をやめるというより、むしろ事業体が集約化してしっかりと森林が管理できるような仕組みに展開していきたい。おそらく整備自体は今までよりも進めるような形で県も考えているのではないか。ただ新しい締結がなくなってしまうので、そこをどうカバーしていくかが課題である。

（松本会長）10 年前に間伐した山が締結されていればまたそこを再度間伐することはできるが、新しい締結はできないということか。実績がある 1,300ha の森林は締結済みなので、２回目、３回目の間伐は確保されているのか。

（事務局）当面、10～20 年くらいの期間は確保されているが、この 1,300ha の森林は契約時期がバラバラであるため、できれば集約化事業に移行できる箇所はしていきたい。できない箇所は継続して補助していく。

【事業コード 2-3-1　津久井産天板交換事業（№８）】

（淵上委員）今年度で、市内の小学３年生については机の天板の交換が完了する。

（松本会長）過去の審議会でも発言したが、卒業生に対してヒアリングをしたいと考えている。中学校の机は一般的な天板なので、交換についてどう思っているか調査したい。事業を開始して 10 年になるので、高校を卒業している年齢の子もいる。

（淵上委員）津久井地域の小学校では全学年の机の天板を交換しているが、旧市内は小学校３年生のみである。

（松本会長）大学生は実施が難しいと思うので、中学校と高校で、天板の交換を経験してない生徒も含めて全体にアンケートを取って、その中で天板を交換した机を使用した割合が何％か、ナラの木や桜の木の天板への交換についてどう思っているかについてアンケートをすることは重要である。市にもご協力いただきたいが、大学として研究や調査をしてみたい。予算は比較的かからないし、中学校や高校の生徒であれば、授業やホームルームの時間で二次元コードを読んで回答してもらう

ことは実施しやすいと思うので、ぜひ協働研究という形でご協力をお願いしたい。
（石原委員）以前も質問したが、これは非常に目を引く事業の一つで、良いことだと思うが、全体の対象に対してどのぐらい進捗しているかを調書に示してもらわないと、見た人は分からず毎年たくさん作っていると思ってしまうので、その点を成果としてはきちんと示してほしい。
（松本会長）小学３年生は今年度で完了するということも重要な成果として書いてもらって良い。
（淵上委員）小学校は市全体で 70 校以上あって約３万人の児童がいると思うが、現在約 7,500 枚の天板の交換が完了している。
（松本会長）まだまだ伸びしろがあると思うが、調査のサンプルは取れると思うので、ぜひ一旦ここで数字にしておくことが重要だと思う。これは大学で予算と労力を度外視して実施しても良い。市には研究に協力いただければと思う。

【事業コード 4-1-1　さがみはら津久井産材利用拡大協議会の運営支援（№９）】
（松本会長）先ほど、需給のアンバランスやミスマッチがあるとの話があったが、原木がこれだけ欲しいとか、山からこれだけ原木を出すといった情報がリアルタイムで共有されるようなシステムや仕組みはあるのか。原木マーケットのようなページに関係者がアクセスして、需給情報を確認できるシステムがあると分かりやすくなると思う。
（事務局）他自治体でも実施しているところがあり、それができれば一番良いと思うが、まだプラットフォームができていないので、今後、視野に入れて話し合いをしていきたい。
（松本会長）システム開発を業者に依頼すると約 100 万円かかってしまうが、最初は例えば、Google の共有フォルダ等にスプレッドシートを保存して、需要側はどのくらい必要で、供給側は現場で月に何本くらい出るといった情報があるだけでも交通整理ができると思う。
（杉本委員）広葉樹を伐採する話を事業体からしたり、問い合わせをもらったり、製材所から依頼があるなど、個々には情報のやり取りをしている。今年度から森林政策課とも情報のやりとりをしていて、仕組みづくりを検討している。
（松本会長）他自治体の仕組みをうまく取り入れていただくとともに、今作っている仕組みをブラッシュアップしてほしい。木材の欲しいタイミングをきちんと伝えてもらえれば事業体は対応するというのが山側の話である。中長期までいかないけれど、見通しはあらかじめ立てていただいて、当然誤差は出るが、そこで数値化していけばだんだんと平準化できると思うので、やはり見える化する必要があると思う。

【事業コード 4-1-1　公共建築物等への利用促進（№10）】
（松本会長）庁内外の公共建築物のさがみはら津久井産材の利用促進を図るということで、積極的に町田市など下流あるいは近隣の自治体に対して、売り込みをしても良いのではないか。例えば内装だけでも良いので木を使ってもらえると、波及効果は高い。相模原市での効果が低いということではないが、山や木が近くにあることで、逆に関心が向きにくくなっているということもある。当た

り前にあると逆に関心を持たない、ないほうが逆に活動が生まれて関心を持ちやすいかもしれない。

【事業コード 4-1-4　木材の多様な利用のための技術・商品開発の促進（№11)】

（松本会長）広葉樹の有効活用に向けて、県と連携してマッチングアプリを活用して取引をするとのことだが、どういった事業なのか。

（事務局）広葉樹を立った状態で撮影した写真や樹種や径級などの情報をマッチングアプリを通じて事業者側に提供し、事業者からどれくらい応募があるかについて、広葉樹林を有効活用していく一つの指標として、県と相模原市で連携して実施している。木もれびの森は手入れが必要な広葉樹が多いため、この場所を活用して実施している。やはり立木では材質について分からないなど、使う側からは様々な要望があったので、今年度は、伐採して丸太の状態にした木をアプリに掲載して、どのくらい需要があるか調べる予定である。

（松本会長）山だけでなく街路樹でも活用されるのか。アプリにはそういった情報があるのか。

（事務局）アプリ自体には情報はあるが、相模原市としては森林での活用をしている。

（松本会長）需要者側の登録者数はどのくらいなのか。

（事務局）現在のアプリは会員制ではなく誰でも見ることができるため、登録者数は分からない。まだ広葉樹の流通自体が不透明である。実際に取引をしたのは今は１～２社しかない。まだスタートラインに立っている状態で、実施する中でどのような需要があって開発していく必要があるかを調べていく。

（松本会長）広葉樹については、確立している市場はあまりないが、潜在的な需要はあると思う。現在はモデル的に実施しているため、今後の推移を見守りたい。奥村組とのドローンによる資材運搬の実証実験については、丸太を運ぶのか、それとも苗木を運ぶのか。

（事務局）奥村組と包括連携協定を締結している中で、木材を山から搬出するのにドローンを使用したいので、一緒に検討できないかという提案があった。丸太はかなり重いため、ドローンの能力では出せないものがあるので、まずは荷上げで活用し、苗木や資機材などを実験的に山に運ぶ。自然相手に実施する中で課題を検証し、ゴールに近づいていければと考えている。

（松本会長）ドローンで苗木を何百本かまとめて運搬することは様々なところでやっているが、植え付け場所にピンポイントで運べないかという技術開発を、大学院生が今年から始めている。まとめて運んでそこから人が小分けにして運んで植え付ける場合、運搬の労力がかかるので、植える場所にピンポイントで置いておければ、あとはクワで掘って植えるだけということができないかということである。奥村組とタイアップできれば面白い。マッチングアプリは今後の動向を見守るが、広葉樹に限らず様々な木材のやりとりに活用できると思う。

【事業コード 4-2-3　施業集約化支援事業　(№12)】

（松本会長）相模原市の山は地籍測量はあまり入っていないということなのか。

（事務局）地籍調査は入っていないようである。旧城山町地区のあたりで山ではなくて市街地に入ったということ以外は聞いたことがない。地籍調査自体がかなり難航していると思う。

（松本会長）実際に杭を打つ時にはよく分からない。それまで関心がなくても、財産の確定になると交渉が難航する。これは地道に行うしかない。森林は昭和 20～30 年代に森林計画を策定する際に聞き取りをした結果を直線で描いているので、不自然な直線的な境界が多い。

【事業コード 5-1-1　里地里山等の整備事業（№13)】

（松本会長）ナラ枯れ被害対策とは、先ほどの石老山とはまた別にナラ枯れ被害木を切ったもので、山ではなく、市街地など、集落寄りや人の生活に近いところの木を伐採したイメージか。

（事務局）そのようなイメージである。

（松本会長）倒れて電車を止めたら、それだけで大事になる。里地里山の整備については、企業の森や市有林の整備と絡めて、企業に目を向けてもらえるように様々な選択肢を作ると良いのではないか。ナラ枯れの木が多くて危ないという場所に費用を出してくれる企業もあると思う。しかも、このナラの木を切るのはスギやヒノキを切るよりも格段に難しいという話と、伐採する人とともに森林にアクセスする利用者の人命保護に貢献することをセットにして打ち出していけば良いのではないか。そういった点に敏感な企業は多いと思う。そして、その木はただ切るだけではなくて、その後小学校の机の天板になるということはストーリーになる。

３　その他

（１）さがみはら森林ビジョンの改定について

松田森林政策課長から、同資料に基づいて、ビジョンの改定に向けた今後の取組について説明を行った。

（２）議事録の作成及び次回の審議会について

事務局から議事録の作成及び次回審議会の開催時期について説明を行った。

４　閉　会

以　上

さがみはら森林ビジョン審議会　出席者名簿

（５０音順）

	氏　　名	所　属　等	備　　考	出欠席
1	石原　朗	公益社団法人　相模原市観光協会 専務理事		出席
2	杉本　貴広	有限会社　杉本林業　取締役		出席
3	淵上　美紀子	一般社団法人 さがみ湖　森・モノづくり研究所 代表理事		出席
4	増田　和美	公募委員		出席
5	松本　武	国立大学法人　東京農工大学大学院 農学研究院　准教授	会　長	出席
6	山﨑　和彦	さがみはら津久井森林組合 代表理事組合長	副会長	出席